コンピテンシー育成開発研究所比較日本学教育研究部門活動報告

【1】比較日本学教育研究部門運営委員会

神田由築（比較社会文化学）、浅田徹（比較社会文化学）、石井久美子（比較社会文化学）、埋忠美沙（比較社会文化学）、遠藤みどり（比較社会文化学）、大薮海（比較社会文化学）、加藤夢三（比較社会文化学）、竹村明日香（比較社会文化学）、田中琢三（比較社会文化学）、谷口幸代（比較社会文化学）、中野裕考（比較社会文化学）、難波知子（比較社会文化学）、藤川玲満（比較社会文化学）松岡智之（比較社会文化学）、宮内貴久（比較社会文化学）、本林響子（比較社会文化学）、湯川文彦（比較社会文化学）

第1回　2022年4月26日
第2回　2022年7月8日
第3回　2022年9月2日
第4回　2022年9月27日
第5回　2022年12月7日

【2】比較日本学教育研究部門研究委員会

神田由築（比較社会文化学）、石井久美子（比較社会文化学）、埋忠美沙（比較社会文化学）、大薮海（比較社会文化学）、田中琢三（比較社会文化学）、竹村明日香（比較社会文化学）、中野裕考（比較社会文化学）、難波知子（比較社会文化学）、宮内貴久（比較社会文化学）、湯川文彦（比較社会文化学）

第1回　2022年4月26日
第2回　2022年7月8日
第3回　2022年9月2日
第4回　2022年9月27日
第5回　2022年12月7日

【3】第24回　国際日本学シンポジウム

テーマ：沖縄の祖先祭祀と墓
主催：コンピテンシー育成開発研究所
　　比較日本学教育研究部門
日程：令和4年（2022）9月17日（土）
　　オンライン開催
【挨拶】坂元章（お茶の水女子大学
　　コンピテンシー育成開発研究所所長）
【司会】宮内貴久（お茶の水女子大学）
【基調講演】
古家信平（筑波大学名誉教授）
「沖縄の火の神、仏壇、墓、御嶽から祖先祭祀を見る」
【コメント】
武井基晃（筑波大学）
宮内貴久（お茶の水女子大学）

【4】シンポジウム実行委員会

神田由築（部門長）
宮内貴久（コーディネーター、司会）

【5】第17回　国際日本学コンソーシアム

テーマ：「モノからコトへ」
主催：コンピテンシー育成開発研究所
　　比較日本学教育研究部門
日程：令和4年（2022）11月19日(土)
　　オンライン開催
参加校：台湾大学、北京外国語大学北京日本学研究センター、パリ・シテ大学、お茶の水女子大学

〇開会式
【挨拶】坂元章（お茶の水女子大学
　　コンピテンシー育成開発研究所所長）

○日本語・日本語教育部会：
【コーディネーター】本林響子（お茶の水女子大学）
【司会】池田來未、柄田千尋（お茶の水女子大学）

林慧君（台湾大学）
「漱石作品における非外来語のカタカナ表記について」
朱桂栄（北京外国語大学・北京日本学研究センター）
「中国の大学の日本語授業の問題点とその解決方案―教師グループの内省シートに基づく分析」
趙萱（北京外国語大学・北京日本学研究センター）
「多義的視覚形容詞の意味拡張に関する一考察――「暗い」と“暗”の中日対照研究を中心に」
連菁（北京外国語大学・北京日本学研究センター）
「句・文を前接成分とする「X系/派/流」についての考察」
戈春暁（北京外国語大学・北京日本学研究センター）
「外来語程度名詞と増加・減少を表す動詞類との共起関係」
西坂祥平（お茶の水女子大学）
「体験型・発信型プロジェクトを通した日本語学習者の防災意識の変容」

○日本文学部会：
【コーディネーター】加藤夢三（お茶の水女子大学）
【司会】小笠原未鮎（お茶の水女子大学）

ベネゼ　リズ（パリ・シテ大学、CRCAO）
「和泉式部の歌群における秋の想像――和泉式部の十首歌群を中心として――」
蘇文甯（台湾大学）
「中世日本における瀟湘八景詩歌の表象について――「遠浦帰帆」を中心に――」
王威鈞（台湾大学）
「林芙美子の戦後作品における〈雨〉の働き――『浮雲』を中心に――」
范淑文（台湾大学）
「一文人としての姿勢――夏目漱石のモノからコトへ――」
李知雨（北京外国語大学・北京日本学研究センター）
「西洋視点で見たHaku Rakuten―英訳能「白楽天」を通して―」
柴田眞希（お茶の水女子大学）
「太宰治中期作品における方法論的系譜の再考」（ポスターセッション）
冨永まゆ（お茶の水女子大学）
「萩原朔太郎の詩作における「言語感覚」と意義――前期詩集『月に吠える』『青猫』から晩年の『氷島』へ――」（ポスターセッション）

○日本文化部会
【コーディネーター】神田由築（お茶の水女子大学）
【司会】邱冠禎（お茶の水女子大学）

遠藤みどり（お茶の水女子大学）
「日本古代官僚人事データベースの構築と活用」
馬雲雷（北京外国語大学・北京日本学研究センター）
「他者と日本の神国思想」
梁媚（お茶の水女子大学）
「中日伝統芸能の継承について」
葺丸謙（パリ・シテ大学）
「日仏比較の視点から見る衛生マスク」

○全体総括
神田由築（お茶の水女子大学）

【6】コンソーシアム実行委員会

神田由築
（部門長、日本文化部会コーディネーター）
加藤夢三（日本文学部会コーディネーター）
本林響子（日本語・日本語教育部会コーディネーター）
遠藤みどり（日本文化部会報告者）

【7】第5回　国際日本学講演会

トークイベント「拡張させない現実感技術
——歴史のデジタルパフォーマンス」
共催：「伝統芸能×未来」プロジェクト（JPAF）
日程：2022（令和4）年7月23日（土）
会場：国際交流留学生プラザ多目的ホール
講師：藤幡正樹（メディアアーティスト）
マイケル・エメリック（UCLA教授、早稲田大学教授）
司会：埋忠美沙（お茶の水女子大学）

研究プロジェクト活動報告

1. 演劇と出版文化
Kabuki Plays and the Publication Culture

①主旨：演劇（歌舞伎を中心に）と出版文化の関係について、主に幕末から近現代の出版物（草双紙、読本、絵本、漫画など）を対象として研究をおこなう。

②プロジェクト担当者：埋忠美沙（本学教員）

③学内研究員：森暁子（コンピテンシー育成開発研究所研究協力員）

④学内協力員：なし

⑤客員研究員：嶋崎聡子（UCLA）、松葉涼子（セインズベリー日本藝術研究所）

⑥研究協力員：宮崎眞帆（コロンビア大学大学院）、メリッサ・リ（コロンビア大学大学院）、ビクトリア・デービス（UCLA大学院）

⑦活動経過：

「演劇と出版文化」をテーマに、歌舞伎を中心として演劇と様々な出版物との関わりを研究している。前記したメンバーの他、学外からは他に仲川広樹氏（株式会社集英社）と吉村麗氏（国立新美術館）にもプロジェクトにご協力いただいている。

3年目となる今年度は、定期研究会と、大学院科目「国際日本文化論」（担当：埋忠）において研究会のメンバーが講師として大学院生を対象に講義をおこなった。

主な活動内容は以下の通り。

1, 定期研究会

・4月25日（月）
・5月25日（水）
・6月30日（木）
・7月21日（木）

2,「国際日本文化論」における講義

・6月21日（火）宮崎眞帆「アメリカにおける能楽研究」
・7月20日（水）松葉涼子「マンガの吹き出しをめぐって」
・12月19日（月）仲川広樹（株式会社集英社）「マンガの国際マーケティング」

2. 前近代日本の「中央」と「地方」
“Central” and “Local” in Premodern Japan

①主旨：前近代日本における政治・経済・文化の中心地は奈良であり、京都であった。そのため当該期の研究の多くは奈良や京都での事象を対象として行われ、その際に用いられる史料も奈良や京都で作成されたものが大半である。一方、地方においても一定度の史料は遺され、それを用いての研究も進められている。しかし、それぞれの研究は独立して行われ、そのまま完結してしまうことが多い。よって本プロジェクトでは、前近代の「中央」と「地方」それぞれの視点から研究を進めつつ、両者を融合させることにより前近代日本史像の総合的構築を試みる。

Nara and Kyoto were the centers of politics, economy, and culture in pre-modern Japan. Therefore, most of the research in this period focused on the events in Nara and Kyoto, and most of the historical materials used in those studies were created in Nara and Kyoto. On the other hand, a certain amount of historical materials have been left behind in local areas, and research using these materials is also being conducted. However, each study is conducted independently and is often completed as it is. This project, therefore, attempts

to construct a comprehensive picture of pre-modern Japanese history by fusing the two, while conducting research from the respective perspectives of the "central" and "local" regions of pre-modern Japan.

②プロジェクト担当者：大薮海（本学教員）

③学内研究員：神田由築（本学教員）、永井瑞枝（本学AA）

④学内協力員：なし

⑤客員研究員：内田澪子（医療創生大学）、巽昌子（東京都立大学）

⑥研究協力員：佐々木満実（元本学特別研究員）、東海林亜矢子（国際日本文化研究センター）、柳澤京子（元本学院生）

⑦活動経過：

本プロジェクトは、メンバー各自で研究を進め、その結果を年度末に開催予定の研究成果報告会で発表することを予定している。本稿執筆が報告会実施前であるため、本プロジェクトに関係するメンバーの研究成果を個別に記載するにとどめる。

まず巽昌子は、編著『コロナ禍で考えた「継承」―デジタル化？デジタルか？―』（雄山閣、2023年）の出版を予定している。これは、日本中世史やロシア近世史、博物館学など異なる分野の研究者が今回のコロナ禍に直面したことを契機として自らの研究分野と改めて向き合い、コロナ禍でさらに進展したデジタル化と歴史学との関係について、それぞれ異なる素材を用いて論じたものである。そのなかで巽は編者を務めるとともに、日本のハンコを素材として考察を行った。

次に内田澪子は、『世継物語』について、複数の説話の註釈を行い、さらに解説論文も執筆した（「『世継物語』解説論文「成立」」『『世継物語』注解』和泉書院、2023年）。『世継物語』についてはいまだ研究が少なく、不明な部分が多い。しかしその内容には中央が独占していた文化的知識が地方へと次第に広がってゆく過程で成立したとみられるものがあり、中央と地方との関係を考える手がかりとなる史料といえ、内田の研究はその解明の端緒となることが期待される。

最後に大薮海は、戦国期の武家官位について複数の事例を取り上げて解説を行った（「三木良頼の姉小路一族化と飛騨守任官」、「徳川家康の三河守任官は国支配の正当性を帯びるためだった」、「六角義賢の左京大夫任官は新たな「京兆家」誕生の布石か」、「「四職」に並ぶ三好長慶の修理大夫任官」、以上『歴史研究』704、2022年）。いずれも、中央（京都）において使用されていた身分尺度が地方でどのように展開したのかを考察したものである。また、中央と地方のいずれも舞台とした争乱であった応仁・文明の乱について、前著（『応仁・文明の乱と明応の政変』吉川弘文館、2021年）の視点よりも長期の視点から改めて検討を行った（「応仁・文明の乱の原因を室町幕府の構造から考える」『歴史地理教育』948、2022年）。なお、上記巽編著においても、中央での儀式継承について、室町期の元日節会や現代の入学式・卒業式を素材として論じた。

3. 英語・日本語における食べ物に対する感覚評価と文化的アイデンティティ
Sensory Evaluation of Food and Cultural Identity in English and Japanese

①主旨：日本語と英語における、食べ物に関する味覚や嗅覚などについての感覚評価の表現について分析する。それらが日英の文化的なアイデンティティ形成とどのように結びつくか等について、インタビューや会話等を材料として研究する。

We propose to investigate how people describe their taste preferences and experience food in English and Japanese. We will use interviews, surveys and

sensory evaluative conversations to investigate how people do use verbal/nonverbal behavior to assess food, influence one another's preferences, and construct identities.

②プロジェクト担当者：石井久美子（本学教員）

③学内研究員：なし

④学内協力員：なし

⑤客員研究員：ポリー・ザトラウスキー（米・ミネソタ大学）、福留奈美（東京聖栄大学）、星野祐子（十文字学園女子大学）

⑥研究協力員：なし

⑦活動経過：

本年度の研究成果は、下記の通りである。

【講演】

ザトラウスキー、ポリー（2022）「否定疑問文を含む発話連鎖について」第9回談話分析コロキアム（山形大学2022.12.9）オンライン

【論文】

Szatrowski, Polly. 2022. How is laughter used to create and reinforce food attitudes in Japanese Dairy Taster Brunch conversations. Journal of Japanese Linguistics 38. 1.5-26.

福留奈美・松浦光（2022）「和菓子の命名における認知的基盤－百科事典的知識を通した文化理解に向けて－」『日本語用論学会第24回大会論文集』

【分担執筆】

ザトラウスキー、ポリー（2022）「4.7敬語の誤用（アメリカ人の場合）」荻野綱男編『敬語の事典』朝倉書店

【寄稿】

福留奈美「感覚とことばが結びつく食育あそび」『いただきます　ごちそうさま』2022年4月号，メイト

4. 哲学、倫理、宗教、科学思想に関する比較思想的研究

Comparative Philosophical Studies on Philosophy, Ethics, Religion, and Philosophy of Science

①主旨：日本人研究者と各国の研究者・留学生が協力して、日本、西洋、東洋の伝統思想や現代哲学の比較研究を行うことによって、日本思想、西洋思想、東洋思想の特殊性、独自性を浮き彫りにすると同時に、共通点についても理解をふかめる。さらに、人間の存在構造、認識構造の普遍性についても明らかにする。日本思想史、西洋思想史、東洋思想史の研究者の意見交換によって幅広い視点から問題を考察する。

②プロジェクト担当者：中野裕考（本学教員）

③学内研究員：なし

④学内協力員：なし

⑤客員研究員：なし

⑥研究協力員：鈴木朋子（東京都立大学）、小濵聖子（東京大学）

⑦活動経過：

本年度は、本プロジェクトで自主的に以前から行っている研究を継続することができた。

◆近代比較思想研究会：本プロジェクトの一環として研究会を定期的に開催した。近代日本の思想家を、世紀転換期の日本と西洋における思想の動向の中に位置づけ、その思想の特色や意義を明らかにすることを目的とする。月一回程度の研究会をオンラインで開催し、国内外の参考資料に目を通し議論を交わすとともに、学外における研究会報告、論文投稿などを行った。メンバーは森上優子氏、清水恵美子氏、研究協力員の鈴木朋子氏である。今年度も多くの思想家を取り上げ、その思想や信仰の相違点と共通点を浮き彫りにするため、テキスト分析や国内外の思潮との関係性などを検討した。

◆日本倫理思想輪読会：本プロジェクトの一環として、輪読会を毎月一回、オンラインで開催した。日本倫理思想史上で注目した文献の解釈を検討し合った他、関連知識の確認などで意見交換を行った。本年度も昨年に続き、折口信夫『古代研究Ⅰ　民俗学篇１』を対象とした。中心となるメンバーは、斎藤真希氏、荒木夏乃氏、清水真裕氏、大持ほのか氏、阿部雅氏、飯田明日美氏であるが、髙島元洋氏、頼住光子氏をはじめ、多くの方のご参加を得た。学部生、院生、OG、教員など、幅広い関係者による読書会となった。

◆古事記（伝）研究会：本プロジェクトの一環として、日本思想の原点となる倫理思想を探求すべく『古事記』および本居宣長『古事記伝』を精読する研究会を6回開催した。大久保紀子氏、高橋幸平氏、矢島壮平氏、中野裕考氏が自由にテキストに向き合い議論した。西郷信綱、神野志隆光らの現代の注釈、さらにはそれ以前の代表的な日本書紀注釈や古事記本文の諸本の異同も参照しつつ、多様な読解の可能性を探求した。

5. 明治・大正期の日独思想・文化交流の多角的研究

①主旨：北欧作家ラーゲルレーヴの日本における紹介者であるドイツの思想学者グンデルトと、その周辺の作家・思想家・知識人を中心に明治・大正期の日独思想・文化交流を研究する。
②プロジェクト担当者：田中琢三（本学教員）
③学内研究員：なし
④学内協力員：なし
⑤客員研究員：なし
⑥研究協力員：なし
⑦活動経過：
口頭発表
田中琢三「フランス第三共和政期におけるナショナリズムと宗教：モーリス・バレスのジャンヌ・ダルク受容をめぐって」、お茶の水女子大学仏語圏言語文化学会2022年度大会、2022年9月17日（オンライン）

6. 近現代における日本文化の特質 Characteristics of Japanese Culture in Modern Times

①主旨：近現代における日本文化の歴史的・現代的特性を明らかにする。具体的には、政治、思想、経済、教育、生活などの多様な視点から、近現代の日本文化の形成・変容を描き出し、一連の分析結果を総合することによって、新たな研究の視点・論点を提起することとする。
In this research project, we aim to clarify the historical and modern characteristics of Japanese culture by examining the formation and transformation of Japanese culture in modern times. Specifically, from various perspectives such as politics, ideology, economy, education, and living, we will depict the dynamics of the formation and transformation of modern Japanese culture, and integrate a series of analytical results to provide new perspectives and issues.
②プロジェクト担当者：難波知子（本学教員）、湯川文彦（本学教員）
③学内研究員：宮内貴久（本学教員）、石井久美子（本学教員）
④学内協力員：水谷有里（本学院生）、土屋心（本学院生）
⑤客員研究員：馬場幸栄（国立科学博物館）
⑥研究協力員：なし
⑦活動経過：
本年度はプロジェクトメンバーが協同した研究活動は実施できなかったが、個々の研究課題に取り組むことによって、近現代における日本

文化の形成・変容に関する新たな見解や論点の提起を試みた。本年度のプロジェクトメンバーの研究活動は、以下のとおりである。

(1) シンポジウム・国際学会等

・難波知子「富岡製糸場における女子作業服の変遷」(報告・パネリスト)、富岡製糸場150周年記念シンポジウム(主催:富岡製糸場)、2022年10月2日

・Yukie Baba, Rebuilding Communities with the Old Observatory Buildings in Mizusawa, ICOM Prague 2022 "The Power of Museums," Online Poster Presentation, August 22, 2022.

(2) 書籍・論文等

・難波知子・渡部旬子「お茶の水女子大学所蔵セーラー・ブルーマー型体操服の来歴と構成」、お茶の水女子大学『人文科学研究』第19巻、2023年3月刊行予定

・湯川文彦「明治維新と地方統治――井上毅・細川潤次郎の統治構想」(伊藤之雄編著『維新の政治変革と思想 一八六二～一八九五』第4章、ミネルヴァ書房、2022年4月)

・湯川文彦「郡県と封建」(山口輝臣・福家崇洋編『思想史講義』明治篇Ⅰ・第9講、筑摩書房、2022年10月)

・湯川文彦「大学史のなかの学生」(小林和幸編著『東京10大学の150年』筑摩書房、2023年1月)

・湯川文彦「明治前期における地方学事の模索と教育認識」(お茶の水女子大学『人文科学研究』第19巻、2023年3月刊行予定)

・馬場幸栄「国立天文台水沢VLBI観測所の原点白黒写真で見る緯度観測所の所員たち」『国立天文台ニュース』No.338, 2022年秋号, ISSN 2436-7230(オンライン), ISSN 0915-8863(冊子版), 24－31頁.

(3) 学会発表

・湯川文彦「明治前期における地方学事の模索と教育認識」(教育史学会第66回大会研究発表、於埼玉大学／オンライン実施、2022年9月25日)

・馬場幸栄「女性計算係の英米日比較」日本天文学会2023年春季年会, 於:立教大学池袋キャンパス, 2023年3月14日.

7. 謡伝書の日本語学的研究

①主旨:本研究では、中世後期以降に作成された謡伝書の記述を分析し、当時の能関係者らが「室町期の発音をどのように発音すればよいのか」という問いにどこまで迫れていたのかを明らかにする。具体的には、室町末期から江戸期にかけての謡伝書の中から発音に関する記述を抽出・分析し、それらから、謡ではどのような発音を規範化し、指南しようとしていたのかを解明する。四つ仮名や開合、連声、ガ行鼻濁音などの例にとどまらず、五十音図やアクセント、音曲道歌などの例も含めて幅広く検討する。

②プロジェクト担当者:竹村明日香

③学内研究員:なし

④学内協力員:なし

⑤客員研究員:山田昇平(奈良大学)

⑥研究協力員:なし

⑦活動経過:

本年度は法政大学能楽研究に定期的に通い、謡伝書の悉皆調査、ならびに発音に関する記述の抜粋・分析を行った。また客員研究員の山田昇平氏と定期的に報告会を行った。

本年度の大きな成果の一つは、契沖の『和字正濫鈔』や本居宣長の『漢字三音考』に、『塵芥抄』という謡伝書の四声観が確認できたことである。『塵芥抄』では「頭」「問ふ」「藤」という三種のトウの語アクセントを用いて、平声・上声・去声の音調を説明している。これらの音調(高低・高高・低高)は、これまで不明とされてきた契沖や宣長の著書での四声観と完全に一致する。『塵芥抄』は江戸期に広く流布し、玄人・素人を問わず享受された謡伝書で

あった。国学者が「漢国」に対する「皇国」の四声を論ずる際に、日本古来の芸能であった謡からその四声観を摂取したのは合理的なことであったと考えられる。

また、客員研究員の山田氏は、「うむの下濁る」という中世の音韻現象に関する言い習わしの歴史について再検討し、従来考えられてきた法華経や博士家の資料以外に、近世の実鑑抄系謡伝書にもこの言い習わしの記載があることから、これらは近世以降に学問の専門領域から民間の口承へと拡大していったことを指摘した。また、四つ仮名の発音規範についての言説が、近世初期～中期の歌学書や仮名遣い書、謡指南書などに集中して出現することに着目し、これらは自然発生的なものではなく、謡曲から歌学への流れを想定すべきであり、その背景には当時謡曲が発音一般に関する規範を担うと同時に広めるメディアとして働いていたことを指摘した。

以上の研究成果をまとめたものが以下の通りである。

【研究発表】

(1) 竹村明日香「宣長と謡伝書――『漢字三音考』にみる四声観の摂取――」第2回文献日本学研究、2023年1月28日、オンライン開催

(2) 山田昇平「文献上にあらわれる発音規範の言説――何故、近接した時期の文献に四つ仮名記述が集中するのか――」第2回文献日本学研究、2023年1月28日、オンライン開催

【論文】

山田昇平（2023）「『うむの下濁る』という言い習わしの歴史」『国語国文』92巻1号、京都大学国語国文学研究室

コンピテンシー育成開発研究所比較日本学教育研究部門
研究年報　研究論文投稿規定

本年報はお茶の水女子大学コンピテンシー育成開発研究所比較日本学教育研究部門の研究年報である。

1. 掲載資格

・投稿論文：投稿資格を有するのは原則として本部門員、及び研究プロジェクトの学内研究員、客員研究員、研究協力員とする。

・公開講演会、コンソーシアムなど、部門が行う各種催しにて講演、発表を行った場合、原則として論文（または要旨）を掲載する。都合により講演者、発表者自身が執筆できない場合には、各会責任者（セッション、部会などがある場合には、その責任者、以下「各会責任者」と記す）が抄録等を掲載する。

2. 原稿の査読

・投稿論文については、査読を行う。

3. 締切

・投稿論文は9月末日、その他講演会、シンポジウム等での講演、発表は開催後2か月以内とする。但し、12月に開催されるものについては別途指定する。1月以降に開催されるものについては原則として次年度の研究年報に掲載することとする。

4. 提出先

・論文は事務局（ccjs@cc.ocha.ac.jp）に提出する。その他、問い合わせがある場合、事務局へ連絡する。

5. 書式

・原稿は、規定の書式に基づき作成する。

・原稿の種類・枚数は以下の通りとする。

投稿原稿：15枚以内

講演・パネル原稿：10枚以内

研究発表：6枚以内

総括・概要：2枚以内

（いずれも、本文・注・図表を含む）

Microsoft Wordを使用

・用紙サイズ：B5判（182mm×257mm）

横書き、22字×38行

・余白：上下25mm、左右17mm

・本文：2段組み

・フォントは下記の通りとし、数字は原則として半角の算用数字を使用する。

	「明朝体」	「ゴシック体」
和文	MS明朝	MSゴシック体
英文	Times New Roman	Arial

・論文名：14ポイント「ゴシック体」左右中央

副題：10ポイント

・執筆者名：11ポイント「ゴシック体」右寄せ

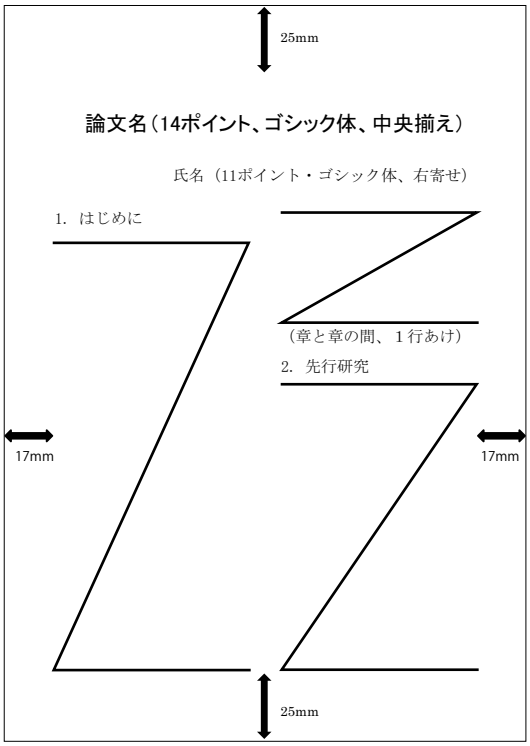
・本文：9ポイント「明朝体」

・注：8ポイント「明朝体」（文末注とする。）

・参考文献：8ポイント「明朝体」

・章と章の間のみ、1行あける。

・図表内の文字も原則として、本文に準じる。本文との間を1行以上あけること。



6. 原稿提出方法

・Wordの電子データを送付する。

・メールには日英両語で題目と氏名、連絡先（郵便番号、住所、電話番号）を明記する。

7. 使用言語

・使用言語は日本語とする。但し、何らかの理由により外国語で執筆することが認められた場合には外国語を用いることができる。

8. 校正及び注意点

・内容、形式面の校正は原則として著者校とし、著者が行う。原則として著者校は1校のみとする。

・事務局は原則として校正を行わない。

・校正は原則、電子媒体を通して行う。

・論文校正と並行し、目次の校正を行う。両者で論文題目や氏名の表記に不一致がないことを確認する。

・以下に該当する原稿は不掲載、または修正を求めることがある。

(a) 内容が本部門の活動趣旨になじまないと判断されるもの。

(b) 内容的に研究論文とは見なせないもの。

(c) 個人攻撃・差別的表現など、公的なメディアに掲載するには不適切と考えられる記述を含むもの。

(d) 極めて煩鎖な組版上の操作が必要であるもの。

9. その他

・投稿論文執筆者には、研究年報刊行時に2冊を贈呈する。抜刷は作製しない。

・著作権などの処理は原則として執筆者が行う。

・研究年報に掲載されたものは原則としてWeb（お茶の水女子大学教育・研究成果コレクションTea Pot）上で公開される。Webでの公開を希望しない場合は事前に事務局へ連絡する。

・同様の内容が報告書等に掲載される場合には、本研究年報をオリジナル原稿とする。

バックナンバーのご案内

『比較日本学研究センター研究年報』(第1～4号)、『比較日本学教育研究センター研究年報』(第5～13号)、『比較日本学教育研究部門研究年報』(第14号～)の掲載の論文(一部除外)は、お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション(https://teapot.lib.ocha.ac.jp)で公開されています。こちらをご覧ください。

お知らせ

大学の組織改編により、比較日本学教育研究部門は、総合知開発研究機構コンピテンシー育成開発研究所の一部門となりました。それに伴い、本誌も名称を変更しました。

編集委員より

今年度は「国際日本学シンポジウム(オンライン)」、「国際日本学コンソーシアム(オンライン)」、「国際日本学講演会」を開催いたしました。「国際日本学シンポジウム」および「国際日本学コンソーシアム」の掲載論文の題目は、一部、発表時と異なるものがあります。著者の方から提出された原稿の通りに掲載しました。また、一部原稿は要旨のみの掲載となっております。なお、概要は報告時の題目を記載しております。表記などについては編集の都合上、編集委員で統一させていただきました。

『コンピテンシー育成開発研究所比較日本学教育研究部門研究年報』
責任者:部門長　神田由築
2022(令和4)年度編集委員　中野裕考　芹澤良子　森暁子

*本年報は、「「総合知」を創出し社会変革をもたらす「コンピテンシー」育成基盤の形成」による成果の一部です。